

Measure for Measure における二者択一

舟 木 茂 子

(1)

To whom should I complain? Did I tell this,
 Who would believe me? O perilous mouths,
 That bear in them one and the self-same tongue,
 Either of condemnation or approval,
 Bidding the law make curtsy to their will,
 Hooking both right and wrong to th' appetite,
 To follow as it draws! I'll to my brother.
 Though he hath fall'n by prompture of the blood,
 Yet hath he in him such a mind of honor
 That had he twenty heads to tender down
 On twenty bloody blocks, he'd yield them up,
 Before his sister should her body stoop
 To such abhorr'd pollution.
 Then, Isabel, live chaste, and, brother, die;
 More than our brother is our chastity.
 I'll tell him yet of Angelo's request,
 And fit his mind to death, for his soul's rest.

(II. iv. 171-187)

兄 Claudio の命乞いをする Isabelle の姿に情欲を掻き立てられた Angelo は、彼女に、兄の命を助けたくば、その身を彼に委ねるよう強要する。兄の助命か、それとも我が身の純潔かの「二者択一」を迫られた Isabella は、“Isabel, live chaste, and, brother, die” との答を出す。

J. L. Styan は、Shakespeare 劇における独白の機能を 4 つに分類し、その 2 番目の項を、この Isabella の独白を使って次のように説明している。

For the *theme* of the play : to propound or point the moral significance of an action already witnessed. Nevertheless, Shakespeare rarely speaks in his own voice, and such a soliloquy is usually meant to affect the audience as would an open-ended discussion. Thus the apparent finality of Isabella's decision at *Measure for Measure*, II, iv, 184,

.....

does not resolve, but accentuates, the hard choice between life and honour forced on the spectator's attention.⁽¹⁾

すでに観客の前で繰り広げられたアクションの持っている道徳的な意味、重要性を指摘するということは、この場合、‘命か名誉か’の選択という作品全体のテーマと、Isabella 個人との関り方を言うのであろう。一体 *Measure for Measure* における‘命か名誉か’の選択は如何なるものなのであろうか。Isabella 個人に突きつけられたこの問題が作品全体とどう関っているのだろうか。そして Styan の言うように、この Isabella の独白は、彼女が直面している選択に、真の解答を与えているとは言い難い。だが Isabella は彼女自身に対しては答を与えている。少なくとも彼女の中ではそう意識されている。しかし我々は納得しかねるものを感じる。それはどこから生じるのであろうか。彼女が出した解答とは如何なるものなのか。Shakespeare は確かに彼の主張を生々の形で作品に盛り込むことの稀な劇作家である。この *Measure for Measure* についてその意図、位置づけをめぐって種々の、時に相反する解釈、意見が提出され続けてきたことにもそれは明らかである。ここでは、Isabella そして Claudio を中心に、さらに公爵、Angelo を加えて、彼らに課せられる選択の問題を検討することによって、この作品をめぐる議論に加わってみたいと思う。彼らの「二

者択一」を通して、作品 *Measure for Measure* の本質を捉えることができるのではないかと考える。

先に引用した Isabella の独白の178行以降で、Claudio が20回首を切られることがあろうとも “honor” を持ち続けるであろうと描くことにより、彼女にとって ‘名誉’ は死をもってしても守らなければならないものであることが示される。彼女にとっての ‘名誉’ は、彼女の純潔を守ることである。エリザベス朝時代の未婚の女性にとっての名誉は、常に純潔を守ることを意味しており、⁽²⁾ Isabella のあくまでも “chaste” であろうとする強固な意志は、当然のこととして受け入れられる。問題は、彼女がこの意志を貫ぬこうとすれば、Claudio の命は明日にも断ち切られてしまうという重大な事態を招来することにある。ここで彼女はあくまでも辱しめを拒否し、彼の死を選ぶ。この決意を述べる彼女の言葉の中に、我々を当惑させるものがある。“Isabel, live chaste, and, brother, die” の中の “live” である。何故彼女は単に ‘be chaste’ と言わなかったのであろうか。ここで “live” と言ったのは、当然その後の “die” との表現上の対比からであろう。しかしそれだけであらうか。Isabella にとっては、“chaste” であり続けることが第一であり、‘生きながらえる’ ということはそれとどう結びつくのであろうか。

Isabella は、これまですでに ‘名誉’ を守ること、すなわち性的な辱しめを拒み、純潔を守ることと、人間の生死を結びつけている。

As much for my poor brother as myself :
That is, were I under the terms of death,
Th' impression of keen whips I'd wear as rubies,
And strip myself to death, as to a bed
That longing have been sick for, ere I'd yield
My body up to shame.

(II. iv. 99-104)

上の特徴が3つ挙げられる。まず、直前のセリフと同様假定法が使われていること、そして Angelo が “Your brother” と個別的な表現をしているのに対して、“a brother”, “a sister” という一般的な表現がとられ、‘my brother’, ‘I’ もしくは ‘Claudio’, ‘his sister’ とはなっていない。また100—104行とは打って変って無色の表現となっている。これらから、Shakespeare は意識的に、具体性、個別性を排除し、假定の論とし、Claudio の生死と直接関係づけるよりも、そのような状況のあるなしに関らず、本来的に一途に純潔を固守しようとする Isabella を描き出そうとしていると言える。彼女にとっては‘死’は二義的なもので、言葉のあやとして提示されていることが、さらに実証されている。

このことは、108行目の “die for ever” という表現からも裏付けられよう。Lever はこの “die for ever” における ‘死’ を、‘the eternal death of the spirit’⁽⁴⁾ と注している。肉体の死ではなく、魂の死、すなわち比喩的な死が持ち出されている。エリザベス朝人にとっての、‘魂の永遠の生命’の重要性は、現世や肉体を蔑視する考え方や、死後の名声を求める態度からも推測できる。Isabella にとって、‘名誉’が如何に重要であるかが再び示されていると言える。とはいえ、Claudio の差し迫った死を前に、比喩的な死を持ち出している Isabella の心理はどういうものなのであろうか。“death,” “die” と一見自然な流れのように見えて、全く質の違うことを並べていることを彼女は意識しているのであろうか。

ここに彼女の「選択」に含まれる疑問、問題が示されている。兄の助命か、あるいは自らの名誉、純潔かという時に、すでに彼女自身が持ち出している‘慈悲’を、彼女自身の「二者択一」の選択に含めようとはしないことが、兄の命よりは、自分の魂の永遠の生命を選ぶという無慈悲な表現となって表れているのである。

Claudio と Juliet の行為を、Isabella は当初から罪と見なしていた。彼の助命の嘆願に Angelo を訪れた彼女は、Claudio は正義をもって罰っ

せらるべきである (II. ii. 29-30) として, “justice” の重要さを示した。彼女が正義が執行されるべきであるとしつつも兄の助命を願う足掛りにしたのは “mercy” である。

No ceremony that to great ones 'longs,
Not the king's crown, nor the deputed sword,
The marshal's truncheon, nor the judge's robe,
Become them with one half so good a grace
As mercy does.

(II. ii. 59-63)

正義の執行の正当さを “There is a vice that most I do abhor, / And most desire should meet the blow of justice” (II. ii. 29-30) と, 強調語法, 最上級を使い簡明に述べた Isabella が, Angelo に “mercy” を求めるときには, 直喩を使い, 説明的な表現をとっている。これは何とか Angelo に分からせたいがための語法ともとれるが, この嘆願の最初の部分では, Isabella は Lucio に「冷たすぎる」と言われるように, 正義感に支配され, 形通りの訴えしかしていない。彼女が直喩を使って長々と事例を並べたてることに, 彼女にとって正義の執行を停止して慈悲をもたらすことが, 努力を要することであることが示されていると言えよう。‘正義’ と ‘慈悲’ の検討あるいは両者間の選択が, *Measure for Measure* のテーマの一つとなっているが, Isabella にとって両者は等価値のものではないことが分る。しかし, 彼女は Angelo に再三慈悲を請うている。その彼女が Angelo の要求に出会った時に, to be chaste=to be merciless と to be unchaste=to be merciful という図式が生じるはずである。さらにより広い人間観にあっては, to be merciful=to live for ever となり, to be merciless=to die for ever という等式が成立しよう。

一直線に正義を貫き, 名誉を守ることを選択する彼女の意識には, (1)

to be chaste (=to die)=to live for ever (貞節を守るためなら、喜んで死を迎え、魂の永遠の生命を得る), (□) to be unchaste (=to live)=to die for ever (辱しめを受けつつ、この世に生き、永遠の死を招く)の図式が出来ているのであろうが、慈悲の問題を含めると (イ)' to be chaste =to be merciless=to die for ever, (□)' to be unchaste=to be merciful=to live for ever という等式に変わり、これを意識した時は、より複雑で絶望的な選択が突きつけられることになるはずである。選択不可能ともいえる。まさに Hamlet が “To be, or not to be” で言い表したあの選択不可能の「二者択一」⁵⁾ に比せられるものとなる。(イ)' か (□)' かの選択においては、いずれを選ぼうとも必ず負価が生じ、真の選択にはならない。ところが Isabella には、この二者の選択が強く意識され、己れの内部の問題として真に苦悩した徴候がない。Shakespeare は意図してこの選択を避けているのではなからうか。

これまでの Isabella に自らの生死が意識される時、常に‘死’となって現れた。一方 Claudio の処刑による死と同レベルの自らの生死の選択問題は彼女にはおこっていない。とすると彼女の “Isabel, live chaste” の生はどういう意味を持つのであろうか。言葉のあやとしての‘死’さえ消え去り、‘生’が前面に出てきている。これは一つには彼女の中に、具体的な慈悲心の発現がないことを意味している。もう一つの意味は他の人物達の選択と合わせて考察していくことにする。

(2)

Claud. Now, sister, what's the comfort?

Isab.

Why,

As all comforts are: most good, most good indeed.

Lord Angelo, having affairs to heaven,

Intends you for his swift ambassador,

Where you shall be an everlasting leiger;

Therefore your best appointment make with speed,
To-morrow you set on.

Claud. Is there no remedy ?

Isab. None, but such remedy as, to save a head,
To cleave a heart in twain.

Claud. But is there any ?

Isab. Yes, brother, you may live ;
There is a devilish mercy in the judge,
If you'll implore it, that will free your life,
But fetter you till death.

Claud. Perpetual durance ?

Isab. Ay, just, perpetual durance, a restraint,
[Though] all the world's vastidity you had,
To a determin'd scope.

Claud. But in what nature ?

Isab. In such a one as, you consenting to't,
Would bark your honor from that trunk you bear,
And leave you naked.

Claud. Let me know the point.

Isab. O, I do fear thee, Claudio, and I quake,
Lest thou a feverous life shouldst entertain,
And six or seven winters more respect
Than a perpetual honor. Dar'st thou die ?
The sense of death is most in apprehension,
And the poor beetle that we tread upon
In corporal sufferance finds a pang as great
As when a giant dies.

Claud. Why give you me this shame ?

Think you I can a resolution fetch
From flow'ry tenderness ? If I must die,
I will encounter darkness as a bride,
And hug it in mine arms.

Isab. There spake my brother ; there my father's grave
Did utter forth a voice. Yes, thoh must die :

Thou art too noble to conserve a life
In base appliances.

.....

Isab. O, 'tis the cunning livery of hell,
The damned'st body to invest and cover
In prenzie guards! Dost thou think, Claudio,
If I would yield him my virginity,
Thou mightst be freed!

Claud. O heavens, it cannot be.

Isab. Yes, he would give't thee, from this rank offense,
So to offend him still. This night's the time
That I should do what I abhor to name,
Or else thou diest to-morrow.

Claud. Thou shalt not do't.

Isab. O, were it but my life,
I'd throw it down for your deliverance
As frankly as a pin.

Claud. Thanks, dear Isabel.

(III. i. 54-105)

Isabella は、自らの辱しめよりは兄の死をという彼女の選択の上に立って、Claudio に懸命に死への覚悟を促す。ここで Isabella は雄弁に語り、Claudio の半行のセリフと対照的である。この Isabella のセリフに特徴的なことは、直喩が多用されていることである。直喩は思想が凝縮された隠喩より、比較が明確に示される利点とともに、より高い緊密さを欠いて説明的になる。Isabella の選択を Claudio に説き、納得させるのに非常な努力をしていることが、ここの直喩に示されている。これは Angelo に “mercy” を求めるときに、彼女が直喩を用いていることと共通する。自分の名誉を守ることを選び、従って Claudio の死を決定的にする Isabella の逡巡が、直喩となって表れているといえる。一見雄弁に語る Isabella は、この不安定さ、すなわち、彼女の「選択」の不完全さを示すが如く、

Claudio を容易に動かすことができない。彼女が一つのことを語り終るやいなや、彼はせっかちに半行の言葉で、先を促していく。彼の聞きたいことは、助命の道があるか否かのみである。この場の両者のずれが、雄弁な Isabella と半行分を挟んでいく Claudio の均衡のとれない対話に如実に示されている。

Isabella は、63—66 行で、もし Angelo の提案した救済策を受け入れて、生命を得たとしたら、それは、to live=to be shameless=to die for ever となると Claudio に言い聞かせている。こうして得た生命は、“feverous life” にすぎない。それよりも死を選び “perpetual honor” を、すなわち to die=to be honourable=to live for ever を選ぶように勧める。これは、彼女が回避した to live chaste=to be merciless=to die for ever と to be unchaste=to be merciful=to live for ever の間の選択を Claudio に押しつけていることになる。明快にこの論を展開してみせても、Isabella の言葉は Claudio の心の中にまで届かない。

Isabella に‘死’への覚悟を促された後、半行分の言葉しか発しなかった Claudio が始めて数行分話す80行以降のセリフは一見、彼女の説得が効を奏し、彼が‘死’を覚悟したかに見えるが、そうではない。“If I must die, / I will encounter darkness as a bride, / And hug it in mine arms” は2幕4場100—104行の Isabella の言葉と全く同種、同質のものである。‘死’と‘性’が結びついたエロティックな表現であり、しかも Isabella と同様、Claudio も仮定法を用いている。死刑の宣告を受け、明日にも処刑という状況でのこのような表現は、その処刑から生じる死とは遠く、むしろ生のイメージを含む。新床で花嫁を抱く新郎の姿から、‘性’、‘生殖’、‘誕生’が連想される。そして Claudio 自身未だ仮定法を用いて自分の死を迎える様を描くところに、Isabella の説得の無力さとともに、彼の生への強い欲求が示される。

Measure for Measure 開幕早々に示される Claudio の死刑宣告は、

Isabella と Angelo の対面を設定し、Angelo の変容を招き、Isabella の危機を生じさせた。このアクションのみを追うとき我々は、避けがたいリアルな‘死’が厳然と存在するものと思い、Isabella と Claudio の運命を、手に汗して固唾をのんで見つめることになる。しかし作品全体を見なおしたとき、この‘死’が実は仮定のものであり、‘性’すなわち‘生’と結びついていることが分る。処刑の宣告を受けた Claudio は妊娠した Juliet と一緒に始めて舞台上に登場する。彼の犯した罪が‘性’から生じたことが、言葉だけでなく視覚的にも観客に強く印象づけられる。それはまた出産という新しい生命の誕生を期待させるものである。Claudio が登場して最初に出会うのは Lucio 等喜劇の世界の人物達である。Lucio にあっては、Claudio の状況すら観客に笑いを引き起させるものにされてしまう。Claudio が Lucio に Isabella への使いを頼み、Isabella なら Angelo を説得できるだろうと言うのを受けて、Lucio は次のように言うのける。

I pray she may; as well for the encouragement of the like, which else would stand under grievous imposition, as for the enjoying of thy life, who I would be sorry should be thus foolishly lost at a game of tick-tack.

(I. ii. 187-191)

縄をかけられた Claudio を見ながら、観客はこの卑猥な言葉に大いに笑う。この後、彼 Lucio や Pompey 等によって、Angelo の冷やかさ、非人間性、そして彼が Claudio 処罰に適用した法の馬鹿馬鹿しさが繰り返し述べられ、ウィーンの庶民達の価値感が示される。その結果 Angelo が持ち出し、Isabella が当然と受け取めた‘正義’の価値の相対化がなされる。Claudio の処刑は、庶民達の価値観からすればあり得ぬことなのである。やってくるかもしれぬ Claudio の‘死’を一方で用意しながら、Shakespeare は、‘性’を通して、より幅の広い人間性と‘生’を同時に

示し続ける。

Measure for Measure においては‘死’は仮定の状態であることが強調されていると言える。これは上に引用した3幕1場103行以降の Isabella の “were it but my life...” でも繰り返されている。そしてこの Isabella の言葉は，“mercy” が如何に彼女の中に取り込みにくいものであるかを示している。「純潔ではなく生命であったなら Claudio を助けるために投げ出すものを」という表現が、彼女に特徴的な表現であることは、すでに(1)で見た通りである。彼女にとって自分の‘死’は常に言葉のあやなのである。すなわち何の実効的な働きをもたない。そしてこの表現をとることによって、彼女の “mercy” の特質が同時に示される。彼女の‘死’が仮定のものであり、言葉のあやであるのと同じく “mercy” は、彼女の中で実体とはならない。

長い Isabella との言葉のやりとりの結果 Claudio は、卑劣な手段であれ、我が身の助かる道があると知ると、‘生きる’ことを選ぶ。‘名誉’を指摘しての Isabella の説得(87-88)も全く無駄であった。

Claud. Death is a fearful thing.

Isab. And shamed life a hateful.

Claud. Ay, but to die, and go we know not where;

(III. i. 115-117)

この後続いて Claudio は、死への強い恐怖を、冷い煉獄での苦しみを描いて示す。その死の恐しさに比べたら、もっとも辛く厭わしいこの世の生活も極楽であるといい(118-131)、生への執着を明らかにする。

Sweet sister, let me live

(III. i. 132)

自ら “chaste” を守る名誉を選択した Isabella の “Thou art too noble to conserve a life / In base appliances.”(87-88)という言葉は、Claudio の

What sin you do to save a brother's life,
Nature dispenses with the deed so far,
That it becomes a virtue.

(III. i. 133-135)

によって打ち消される。Isabella の “mercy” を除去しての選択 “to live chaste” は、Claudio の名誉を無視しての ‘to live’ の選択とぶつかり合う。Isabella が自身の名誉を守り生きていくことは、Claudio の生命を見捨てることによって可能となり、Claudio が生き続けられるのは、名誉を捨てること、すなわち Isabella の純潔を犠牲にすることによって始めて実現される。両者の選択は、一人一人の中で完結するものではない。

Measure for Measure には、数年前に書かれたと推定される *Hamlet* を我々に思い起させるものが多分に含まれている。特に「二者択一」に関係することにそれが認められる。Claudio の “Ay, but to die, and go we know not where” を聞いて、我々はすぐ Hamlet の “To be, or not to be” で始まる第三独白の中の “But that the dread of something after death, / The undiscover'd country, from whose bourn / No traveller returns, puzzles the will” (III. i. 77-79) を思い出す。Shakespeare は *Hamlet* で “To be, or not to be” を使い真に悲劇的な「二者択一」を十分に描いてみせてくれた。彼は王子 Hamlet を通して、人間の尊厳、苦悩、大きな力に対する無力さを、すなわち真の悲劇的人物を我々に示してくれた。その Shakespeare がこの *Hamlet* での経験を、*Measure for Measure* で利用したとして不思議はない。しかも彼の経験の利用が単なる反復でないところに、彼の偉大さがある。

Hamlet と *Measure for Measure* における「二者択一」が同質でないことは、今まで述べてきたことですでも明らかである。Hamlet に課せられた「二者択一」に含まれる、忘霊は亡父の霊か悪魔の化身かの見極めは、彼にのみ課せられた課題であり、亡父の霊であることが明らかにな

ったとき、その事態にどう対処すべきかは、やはり彼自身の問題であり、他の何者も彼にとって代ることができない。劇中劇を仕組むのは彼で、その結果 Claudius に危機を知らしめ、彼に動きを与えるのは Hamlet である。そして父の死の復讐を果すことは、彼以外の人間が関ることではなく、復讐すべきであるか否かが、彼の「二者択一」に加わる。復讐せずに無為に送る生活は真の‘生’とはいえず、一方復讐として Claudius を手にかければ、王殺しとして自らの生命も同時に終ることを意味する。彼を取り巻く人々、特に母 Gertrude と恋人 Ophelia が信頼できるか否かは、彼の全存在を揺がす。彼が Polonius を誤って殺害することが、Ophelia の死を招き、さらに彼は殺人者としての汚名を自ら着ながら、自分の取るべき道を模索しなければならない。彼の行動、言葉が他の人々に重大な影響を与え、彼らの反応がまた、Hamlet に返ってくる中で、彼は他の人物に肩代りしてもらうことの不可能な「選択」を引き受け、自らの奥底を見据えていかなければならない。彼はそこから逃げ出すことはない。Hamlet においては「二者択一」を始め、すべてのアクションと思考が求心的に Hamlet へ、そして彼の内部へと集中する。

Measure for Measure における「二者択一」の特徴は、Hamlet に見られた求心性がないこと、すなわち、複数の人間にこの課題が背負わされることと、その複数の人間のそれぞれの「選択」に、Hamlet の「選択」にあった自己完結性が欠けていることにある。Isabella も Claudio も、彼らの「二者択一」に含まれる全ての要素を引き受けることをせず、お互いの犠牲を当てにした選択を行った。Claudio は Isabella の“virginity”を犠牲にすることによって、彼の「二者択一」を‘to live or to die’と単純化して、‘to live’を選んだ。Isabella もまた、正義、名誉、慈悲全てを考慮した複雑な「二者択一」を避けた。すなわち、慈悲は、仮定としての死の想念と結びついて、実体として浮かび上がらぬまま彼女の選択要素から簡単に除外された。と同時に、彼女は‘死’の裏にある‘生’と‘純潔’

とを結びつけて意識し、選択し得るものの中に含めた。この結びつきを可能にするのは、皮肉にも‘死’とも結びついて現れる彼女の性意識と考えられる。これら Claudio と Isabella の‘生’の選択が、作品全体とどう関わっているのかを次に考えなければならない。

(3)

Pom. Truly, sir, I am a poor fellow that would live.

Escal. How would you live, Pompey? by being a bawd?

What do you think of the trade, Pompey? is it a lawful trade?

Pom. If the law would allow it, sir.

Escal. But the law will not allow it, Pompey; nor it shall not be allow'd in Vienna.

Pom. Does your worship mean to geld and splay all the youth of the city?

Escal. No, Pompey.

Pom. Truly, sir, in my poor opinion, they will to't then. If your worship will take order for the drabs and the knaves, you need not to fear the bawds.

(II. i. 223-235)

Pompey は Lucio とともに、時に背理を含む、庶民の率直で、直感力と生命力にあふれた基準、価値観を示す。Elbow に訴えられて、Escalus の裁きを受けている中で、Pompey は、Angelo が長い眠りから醒させた法律が如何に馬鹿げたものであるかを、Angelo の正義感、というより極端な法律尊重主義に対して、それと好対照をなす、とうていあり得ない極端な状況をぶつけて示している(230—231)。Claudio の死を招くやもしれぬ法律の存在を知りつつ、‘法律が許してくれれば女衞を続けますよ’、とうそぶく彼の豪胆さに、観客は笑いころげ、拍手を惜しまない。この Pompey が第一に考えるのは、‘生きること’である。活気のある庶民達および

Lucio には‘死’の入り込む余地はない。彼らには‘生きたい’という気持しかない。その彼らにとっては、‘性’を取り除いた人間は人間ではない。これが彼らの根底をなす価値観である。これに Esculus は‘如何に生きるか’の問いを投げかける。223—224 行の Pompey と Esculus の対話こそ *Measure for Measure* のメイン・テーマと考えられる。

所与として Claudio の死刑確定が設定されて、これを軸にして悲劇的な展開をしているかに見えるこの作品は、Claudio, Isabella, Angelo, Duke 等の世界と、Lucio や Pompey 等の世界が合わせ重ねられ、両者が融合したものなのである。この融合を追っていくとき、この‘生きる’ことへの意志と‘如何に生きるか’という問いが、常に Claudio, Isabella, Angelo, Duke 等の世界をも支配していることが明らかになる。

(1) の冒頭に引用した Isabella の独白で、彼女は“Isabel, live chaste”という選択をした。この結論を得る前の部分をここで検討してみたい。Spurgeon は、*Measure for Measure* のイメージの特徴を述べる中で、

...what strikes one first is the unusual pictures they [=the twenty-seven images in the play] conjure up, and their touch of grimness, grotesqueness, or a vividness so piercing as to give one a shock almost as if from lightning.

Many of these are personifications, semi-comic, and very arresting, such as ‘liberty plucks justice by the nose’, ‘bidding the law make court’sy to their will’, ‘make him bite the law by the nose’. Others are marked by what is, even for Shakespeare, an unusually vivid use of concrete verbs and adjectives applied to abstractions:

Hooking both right and wrong to the appetite,
To follow as it draws;

...(6)

とこの独白の Isabella の言葉を説明している。‘法律’とか‘正・悪’と

いう抽象的な事柄が具体的に描かれていること、しかも Spurgeon はそこに半ば喜劇的な面を見出している。1幕3場29の“liberty plucks justice by the nose”は Duke のヒューモラスなセリフの中にある言葉で、この Isabella の言葉にそれに似た言葉があることは面白い。

さらに Isabella の独白の中の幾つかの表現上の技巧を指摘してみる。彼女は179—181行で誇張法を用いている。そしてそこに2種の頭韻と、179, 180行の行末に“down”と“up”の反意語を置いている。ここでもまた仮定法が使われている。Claudio を死に追いやる決断をする前の Isabella の必死の思いが感じ取れる。最終結論を出すために、彼女は多くの技巧を用いて、Claudio の名誉心の強さを、すなわち彼女の決断の有効性を彼女自身に示そうとしている。さらにここで、この必死の思いの彼女の言葉に使われている“head”の語のもつ連想を、これまでの劇の展開から見る必要がある。

Lever は、Lucio が縄をかけられた Claudio に向かって言う

...thy head stands so tickle on thy shoulders that a milkmaid,
if she be in love, may sigh it off.

(I. ii. 172-174)

の“head”と‘maidenhead’の結びつきを指摘している。⁽⁷⁾ またこうした“head”について

The quibbles on ‘head’ by Lucio and Pompey give this word
...an equivocal sense, so that the cutting off of heads also
suggests the act of procreation.⁽⁸⁾

と述べている。Isabella の‘汚れ’を拒否する決意を述べる言葉に、‘性’や‘生殖’を連想させる語が使われているのである。さらに処刑として首を刎ねることについての Esculus と Pompey のやりとりは、笑いを引き起こし、‘性’という個人的なものに厳しい法を適用することの愚かし

さを示している。

Escal. There is pretty orders beginning, I can tell you: it is but heading and hanging.

Pom. If you head and hang all that offend that way but for ten year together, you'll be glad to give out a commission for more heads.

(II. i. 236-240)

このやりとりは、(3)の冒頭の引用に続くものである。Pompeyの表現は、Isabellaの言葉に劣らず大げさなものである。これらLucioとPompeyの言葉を聞いている観客は、Isabellaの独白を聞き、当然そこに‘性’との繋がりとして、その‘性’の罪を犯したClaudioの断罪が馬鹿馬鹿しいことを感じる。このIsabellaの独白は、彼女の絶望的な状況を示し、その特異な状況で「選択」を強いられた彼女の心理状態を表す中で、無意識の性意識を浮かび上がらせ、喜劇の世界との融合を明らかにする。この2幕4場の最終場面に至る過程、すなわち劇の展開を見てきている観客は、このIsabellaの言葉の背後に、‘性’と結びついた‘生’を感じ取る。批評家達にIsabellaの独善性や非人間性を指摘するのに使われているように、観客に、彼女への共感を失わせしめる可能性のある“Isabel, live chaste, and, brother, die”を、Shakespeareが彼女に言わせたのは、彼がここに至るまでに観客に与えたものから、今述べた観客の心理を計算し得たからであろう。Glessの*Measure for Measure*全体の調子についての指摘⁹⁾は、充分留意されるべきである。ここで彼は次のように言っている。

From the beginning of the play...the serious and potentially tragic tone of *Measure for Measure* is modulated by long stretches of boisterous and freewheeling comedy. In short, it is manifest—especially in the theater, where narrow prejudices undergo insistent assault from the art of living actors and the ingenuity of directors as well as from language alone—that uniformity of tone is to be found in *neither* half of the

play.⁽⁴⁰⁾

Isabella と Claudio の「二者択一」はこのようなコンテキストで捉えるべきである。彼らの「二者択一」は当初から Hamlet のそれとは違うものとして示されている。Measure for Measure では、‘生’への志向の流れの中で「選択」が行われる。

Hamlet における「二者択一」が主人公 Hamlet のみに課せられ、すべてのアクションそして彼自身の思考が求心的に彼に集中しているのとは決定的に違い、Measure for Measure においては、Isabella, Claudio, Angelo そして Duke にこの「二者択一」が課せられている。彼らが引き受けなければならない問題は、互いに絡み合い、影響し合う。この「二者択一」の設定の仕方は、喜劇の特徴である拡散性につながる。また「二者択一」を課せられる四人には、他者依存の傾向が強く出ている。Angelo の「二者択一」は、彼が人に与えてきた清廉潔白な姿を頼みに、Isabella が他の人達に彼の「選択」の悪辣さを訴えようとも、彼に対する人々の信頼が揺がないことを当にしてなされる。Hamlet にあっては、彼が真の生き方を模索し、彼に突きつけられる「二者択一」の選択に苦悩するとき、従来 of 理想的王子像を自ら否定すべく、狂気を装い、彼の本質的な問題に、他の人々が介入することを拒否する。ましてや、自れの「選択」の後ろめたさを、他の人々の盲目性を当てにして消し去ろうとするような考えは微塵もない。一方 Angelo の悩みは、他の人物達の目の不確かさを当にして、彼の実体が白日のもとに晒されることがないことを足掛りに解決される。Isabella は Claudio の従順な死の容認を予期して「選択」を行い、Claudio は Isabella の犠牲を期待して「選択」を行う。彼らが選択したものは、欲望に従うことであり、貞節に生きることであり、死刑をなんとか免れて生きようとするのであった。

(4)

Measure for Measure の動きは、Duke の、ウィーン内の風紀が正されるべく14年間眠ったままにされている法律を目覚めさせ、その法の執行を Angelo に委ね、自らは托鉢僧に変装し、彼の統治ぶりを見ようとするところから始る。彼の托鉢僧への変装は、独立して十分に考察されるべき問題であるが、ここでは「二者択一」「選択」というテーマに関する部分を見てみたい。正義すなわち法の執行は、本来ウィーンの統治者としての彼に課せられた問題である。その彼が Angelo にその仕事を委ねるときの、彼の言葉

In our remove be thou at full ourself.
 Morality and mercy in Vienna
 Live in thy tongue and heart.

(I. i. 43-45)

は、ウィーンの道徳と秩序を回復することと、人々に慈悲を与えることは、彼自身の職務であったことを示している。この彼が、ウィーンから離れると見せかけ、托鉢僧に変装することには幾つかの目的がある。Angelo の統治ぶり、すなわち大きな権限を付与された人間の変容ぶりを観察すること、ここから Angelo の二面性を顕現させることがまず第一。またこの Angelo によって行われる Claudio の死刑宣告と、Isabella への誘惑への Claudio と Isabella 二人の対応の仕方の観察。そしてウィーンの庶民達の墮落ぶりを観察すること。Duke は全ての人物の実体を顕わにする働きをし、なお全てを見通すことのできる唯一人の人物である。この Duke すなわち Vincentio は、Duke としての彼を遠ざけ、托鉢僧として全ての人達に関与し得ることになり、彼の変装は、演劇の技巧として非常に有効なものとなっている。しかも、聖職者への変装は、彼を猥雑な俗世から切り離し、宗教性、精神性を他の人物達にも観客にも強く印象づけ、彼ら

の信頼を得て、‘bed-trick’ と、Claudio の首の代りに Ragozine の首を Angelo の許に送らせることを可能にし、観客の許容範囲を越える危険のある醜悪さが正されるであろうことを示し続ける。そしてこの変装は、結末の神の求める許しを人々に与える者としてふさわしい人格者を用意する。

しかし翻って考えて、以上述べたことは、全て Duke としての Vincentio に課せられた問題ではなかったのか。Duke として、ウィーンの統治者としての彼に、“morality” を選ぶか “mercy” を選ぶかの「二者択一」が課せられていたはずである。Vincentio は、本来の彼、素顔の Duke としてこの「二者択一」を引き受けることを回避した。これが托鉢僧への変装となって現れたのである。この托鉢僧への変装は、慈悲を選択したことを意味しない。現実に出家した托鉢僧にさせるのではなく、あくまで一時の変装をさせることに、そもそも Shakespeare はこの「二者択一」への Vincentio の対処の仕方を示したと言える。Shakespeare は、彼の変装に、法を執行する者のあり方を探らせるという意図を一方で持たせ、他方俗世の法からは距離を置いた聖職者として、宗教的基準、就中許しを前面に押し出させる働きを持たせた。劇の展開とともに、統治者としての役割は背後に押しやられていく。結末において、Duke としての素顔に戻ったとき、冒頭彼自らが問題提起した、ウィーンの秩序回復、正義を如何にして領土内にもたらすかについての明確な答えは示されない。さりとて、結末に彼が人々に与える許しは、この問題の考察を踏まえた、あるいは正義との関りを充分認識し、検討した上での許しとは言い難い。Vincentio にあっては、正義か慈悲かの選択を、正面切って引き受けるようにはされていない。この「選択」を変装を通して試みたことこそ、これまで見てきた他の人物達の「二者択一」と彼のそれとが同種のものであることを示す。Angelo が他の人物達の目を欺き得るとした上で、「選択」をしたのと一脈通じるものがある。Vincentio は Duke である自分と、托鉢僧へと化

身した自分を作り出し、正義と慈悲の問題を、二人の自分に分けて託してしまった。Isabella と Claudio が、お互いが他を頼みとして「二者択一」をするのとやはり通じるものが認められる。

Measure for Measure における「二者択一」は、真の「二者択一」になっていず、全ての人物達が、真の「選択」をしていないことは明らかである。しかし、彼らは「選択」をした。それは、正に生身の人間として、他の人達とともに生きる場での「選択」であった。Vincentio は一方で法を執行しなければならない立場にありながら、托鉢僧に変装して、ときにその法に触れるような行動をとって事の解決を図った。この現実的対処の仕方に、生きている人間、生き続けたい人間の、如何に生きるべきかの模索と行動が示されていると言える。ここに *Hamlet* を通過した Shakespeare の新しい面が示されている。*Measure for Measure* は悲劇ではなく、*Hamlet* の二番煎じでもない。また悲劇として展開してきたものに、後半喜劇的な結末をぎこちなく付け足したものでもないのである。

劇中展開される、全ての人物達の行動と言葉、就中彼らがする「選択」は、この如何に生くべきかの唯一絶対の解答ではない。しかし人間の一つの生き方ではある。その中で、人間の高潔さと同時に、悪辣さ、独善性、精神のかたくなさ、猥雑さ等、弱さ、愚かさ、醜くさが暴かれていく。これをそのまま受容すること、そこに笑いが生じるのである。

変装を解いた Vincentio が最後に与える許しは、自ら二人の自分を作り出し、それらがついに統合されることのなかった、彼の二重性をも含めて、各人物が如何に生きたかをそのまま受容することを意味している。そしてその結果全ての人物がさらに生き続けることになる。それぞれに一つの経験をし、お互いの実体を知った彼らは、それぞれが改めて、‘如何に生きるか’の問いを背負って生きていくことになる。Duke はもう再び変装することはできない。Angelo は、二度と自分も他人も欺くことはできない。Isabella と Claudio は、お互いを犠牲にしての生き方はもうできな

くなる。しかし今後の彼らの生き方、そして再び出会うかもしれぬ「二者択一」が、それぞれどのような形、内容になるかは示され得ることではない。再び彼らは、冒頭に示された秩序の回復がなされたとは言えぬウィーンの中に立ち帰って、生きるのである。性の頽廃がなお続くこの町で、すでに‘性’を自覚した Angelo も、未だその深奥の性意識が押さえられたままの Isabella も次の経験をしなければならぬ。ここに全篇通して繰り返される‘性’の意味がある。この‘性’は、性が本来的に持っている‘生殖’と‘生’との関りを持つと同時に、それぞれの人間が赤い血の流れる存在であること、すなわち人間は皆同じ生地からできていることを自覚し、全的な生き方をするに関っているのである。

Measure for Measure における「二者択一」は、喜劇的世界で絶対的価値を持つ‘生’への志向の流れの中で行なわれ、個々の選択への唯一絶対の解答はあえて回避されている。その中で生きることを選んだ全ての登場人物達そして我々観客は“an open-ended discussion”を続けなければならないのである。

〈注〉

テキストは、G. Blakemore Evans (ed.), *The Riverside Shakespeare*, Boston, 1974 を使用した。

- (1) J. L. Styan, *Shakespeare's Stagecraft*, Cambridge U. P., 1967, p. 166.
- (2) C. B. Watson, *Shakespeare and the Renaissance Concept of Honor*, Princeton U. P., 1960, p. 159.
- (3) J. W. Lever (ed.), *Measure for Measure* (The Arden Shakespeare), London, 1965, p. Ixxxvi 及び p. 60 の注を参照。
- (4) *Ibid.*, p. 60.
- (5) 大山俊一『ハムレットの悲劇』篠崎書林, 1963を参照。
- (6) Caroline Spurgeon, *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us*, Cambridge U. P., 1935, pp. 288-289.
- (7) J. W. Lever, *op. cit.*, p. 17.
- (8) *Ibid.*, p. Ixxxvi.
- (9) Darryl F. Gless, 'Measure for Measure,' *the Law and the Convent*, Princeton U. P., 1979, pp. 16-17.
- (10) *Ibid.*, p. 17.